

(仮) 対等な関係性から始まる集団づくり

～「ケアの倫理」を手がかりに～

静岡高生研 塚本 徹

はじめに

私の実践は時折、「フェミニズム的实践だ」といわれることがある。フェミニズムの何たるかをわかっていない私だが、多分「生徒と教師(私)の『対等』な関係性の中で紡ぎ出される実践という意味なのだろう」ととらえ、うれしく思うことにしている。ここで言う「対等」とは、教師が生徒に対して支配的・家父長的にふるまうことなく、生徒の人権を「尊重」し、生徒から学ぼうとする姿勢を持つことである。(しかし、私の中にある家父長的な側面が実践の中で表出する場面も多々ある。)

「フェミニズム」や「対等」について、「ケアの倫理」から考えたい。これはアメリカの発達心理学者のキャロル・ギリガンの著書『もうひとつの声』(1)に由来し、20世紀後半にかけてフェミニストたちにより発展した。

ギリガンは「道徳的問題の語り方には2通り、自他の関係性についての叙述様式には2通りある」とし、2つの声それぞれに「正義の倫理」「ケアの倫理」という名前を与

えて、両者を対比した。「正義の倫理」によれば、道徳の問題は諸権利の競合から生じるものとされ、形式的・抽象的な思考でもって諸権利の優先順位を定めることで解決が図られる。対照的に「ケアの倫理」—すなわち「すべての人が他人から応えてもらえ、受け入れられ、取り残されたり傷つけられる者は誰ひとり存在しないという理想像」—では、「他者のニーズにどのように応答すべきか」という問いかけが何よりも重視される。

また、「ケアの倫理」では「相互依存」と「文脈依存」という2点が重要とされる。相互依存とは、人は誰しも誰か他の人に対して依存しており、相互依存関係のうちに置かれていることが注視されるということである。文脈依存とは、実際に関係する人たちの利害関心を無視せず考慮するために、細かな状況とその文脈に注意を払う必要があるということである。

以下、これまでの私の実践をこうした「ケアの倫理」に照射しながら見ていくこととする。

1 嘆願署名運動はなぜ起きたか

私は3年間学年主任をした時に、生徒に「自分たちの手で、自分たちの生活をつくる」自治の力を身に付けさせようと実践を重ねた(2)。「困難校」にあたる本校では、後述するようにチケット制による頭髪服装指導を行ってい

た。一方で、中学時に長期欠席をした生徒を特別選抜で入学させていた。私は生徒にとって本校が「楽しい」と思えるような「居場所」にしたいと考えた。学年委員会を組織し、BBQや流しそうめん、餅つきなど「食」の行事にもよく取り組み、一緒に面倒くささを楽しんだ。こうした取り組みによって、生徒が自信を持ち、自分たちで諸問題を解決できるようになれば、チケット制への対抗手段になるのではないかと考えていた。

3年間に問題行動がたびたび繰り返されたが、その都度生徒に向き合った。2年に上がる春休みには、大勢の生徒が喫煙で指導された。2度目の指導となった生徒には申し渡しの席で私は声を荒げた（今思うと家父長的な指導で独りよがりだった）。野球部のAを含む3名は謹慎があげた後も半年間、監督の許しがもらえず練習に出られなかった。ストレスをためていく彼らと6月の文化祭では学年有志企画として「ジェットコースター」に取り組んだ。放課後、多くの生徒が部活動に行く中で、3名と私で作業する日が続いた。この作業が彼らの「居場所」となった。また他のやんちゃな生徒たちもこの作業に加わるようになった。出来上がるかと危ぶまれたが直前の追い込みで完成し、作り上げた喜びと当日大盛況にやれた達成感はお互いに大きいものだった。ただ7月になっても練習に戻れない3名は夏の大会を外野席から応援をした。終業式前日、学年会で彼らの話題になると、多くの教員が

彼らに同情的だったので、翌日に3名を呼び出して激励した。こうした支援も、問題行動を起こした生徒に寄り添うケアとして機能していたのではないだろうか。

そして3年次の6月、Aが「3回目の生徒指導」で実質的な「退学処分」となった際に、嘆願署名運動が起きた。

Aはやんちゃだが、笑顔をよく見せる気のいい生徒だった。学年行事では率先して動き、2年次の文化祭のジェットコースター作りでも活躍した。クラス・学年のムーディーメーカーとしての貢献が抜群だった。Aはこれまでに2回（授業妨害と喫煙）生徒指導を受けたが、謹慎指導等を通して私はたくさん話をして、信頼関係もできていた。

Aは3年次に新たに監督となった新規採用の先生に対して暴言をはき、物にあたった結果彼らが監督にあたり「対教師暴力」と認定された。日曜雨天の体育館での練習時に、ランニングで叱られたAが「いきなり来たアンタになぜ学校生活とかいろいろ言われなきゃいけない。俺はアンタを監督として認めない」と乱暴に主張した。その後、練習メニューのバスケットのゲームから外されると、Aは監督の持っていたバスケットボールとホワイトボードを蹴り（胸に当たる）、帰るよう言われて、野球ボールを投げつけた（ふくらはぎに当たる）。

月曜朝、私は担任のZ先生からこの件について聞いた。Aに聞き取りをしたのも生徒課でもあるZ先生だった。帰り際、Z先生が「Aを残したい」というので「私も同じ

考えです。たたかきましょう」と話した。しかし、火曜の生徒課原案は「自主退学を迫る」ものだった。私は水曜の職員会議の前に校長と話し、Aのこれまでの様子、人柄、私が残したいと思っていることなどを伝えた。しかし校長は原案支持で「教員や他の生徒の安全を守りたい。今回の件でAにも学んでほしい」と言った。

思えば、校長が述べていた「他の生徒の安全」というのはギリガンの言う「正義の倫理」にあたる。しかし、ここにAという一生徒の事情や心情をくみ取ろうという意思は存在しない。

職員会議で私は、「Aは問題もあるが、見どころのある人物です。これまでの謹慎指導でもその都度ちゃんと反省をしてきました。チャンスをください。高校生はミスを繰り返すものです」と発言した。この時、当事者の野球部監督は新採研で出張して不在だった。Z先生は質問に対して答えるのみで、原案に対して発言はしなかった。結局「残したい」旨の発言をしたのは私だけだった。多くの教員が発言し時間をかけたが、原案通りの決着となった。

Z先生には月曜に話したように「残したい」と言ってほしかった。職員会議ではめったに発言しないZ先生だが、本校での勤務が長く、毎朝校門に立ち挨拶と服装指導を続ける年輩の彼には私も含め多くの同僚が敬意を抱いていた。生徒課のZ先生はAの処分にかかわる原案作りに参加したので発言を遠慮したのだろうが、彼なりに揺れ

ていたのだと思う。

夕方に母親とAが来校し、生徒課長とZ先生と私とで対応したが、職員会議での決定を聞いたAはショックを受けていた。私も話す時は泣けてきた。Aは荷物を教室に取りに行き、そこでZ先生と泣いた（と聞いた）。その間に私は母親に話を聞いたが、言い分は母親にもあるようで、監督への不満がたまっていた様子だった。

職員会議の翌日、3年生が嘆願署名活動に動き出した。HRの生徒には朝、担任が話をした（もちろん仲の良い生徒たちはすでに知っていた）が、数名の生徒が趣意書を書くなど署名の準備をしていたようだ。1時間目は私の授業だったが、何となく落ち着かない様子。何やら紙を回している様子だったが、放っておいた。休み時間になると、数名の生徒が下級生の教室に行くのが見えた。

職員室で情報を集めると「Aを学校に残してほしいと訴える署名」を全校規模で集めていることがわかった。管理職に報告すると、副校長が「これは問題のあるやり方だ」というので私は、「そうは思いません。生徒が何とかしたいと思って動いているのですから」と反発した。内心「よくやった」と思ったし、昼休みにほぼ全校分の署名をもって代表数名が校長室に嘆願に来たと聞いた時も「やるなあ」と感心した。そして、午前中に学年部の先生と話し合い、昼休みに野球部の3年生から話を聞いたうえで放課後に学年集会を開こうと決めた。生徒たちから学校批判

や突き上げが出ることも予想されたが、何よりも生徒たちの声や思いを聴き、彼らの思いを共有したかった。

昼休み、野球部員4人からは顧問への不満が噴出した。「俺だってランニングの時一緒に叱られたのになんでAだけが」「Aをやめさせないで」「監督には僕らの話をもっと聞いてほしい」「この件は監督にはできたら黙っていてほしかった」「昨日の出張は仕方ないけど、その後監督には戻ってきてほしかった」等々。Z先生は署名を「ありがたい」と言った。

学年集会ではまず私が、事件の経過を生徒課にもらった書類を読み上げる形で伝えた。その後いったん解散とし、話をしたい者は残るように伝え、27名が残ってそれぞれの思いを語った。「監督を連れてこいや」「進路変更って何？退学ってはっきり言ってよ」「Aがそこまでできたのにはよっぽどの理由があるはずだ」等々。私はひたすら聞くことに終始した。Z先生は「申しわけない」と謝り、HRの女子が「Aがないのにクラスはどうしたらいいの」と泣きながら聞くと「みんなでやるしかないよ」と答えた。集会は30分ほどで終了したが、Aとよく一緒にいた（署名の中心となった）3名が最後まで残った。泣いていた生徒に別の生徒が「おまえはクラスを盛り上げろ。俺は野球部を応援する」と言って出ていった。野球部の生徒は泣きながら「なぜAを止められなかったんだ。一番近くにいたのに」と悔やんでいた。

その後、Aの処遇が変わることはなかった（それが集会の目的ではなかった）が、集会を通して生徒たちの声に耳を傾けたことは、学年生徒のケアにつながったと感じている。

なぜ、生徒たちはAのために立ち上がったのだろう。後日、生徒が署名とともに提出した「嘆願書」と校長への手紙を読む機会があった。そこにはAから助けられたこと、Aから学んだことなどがつづられ、Aが友達思いであることや、「人を軽い気持ちで傷つけける人間ではない」と書かれていた。「私たちの未熟な所も今回の問題につながった」と反省さえしている。それは彼に何かしらの面で助けられて、彼から良いことを学んだからだという。手紙を書いた生徒は、自身のことにも触れ2年次に学校を辞めようかと悩んでいた際に、彼に「卒業まで頑張れ」と言われたことを感謝していた。Aを含む生徒たちは、相互にケアし合う関係性をつくっていたのだ。

この嘆願署名は、生徒たちが学校の決定に対する「異議申し立て」である。学校の支配的な文脈をあぶり出し、指導の正当性を問い直すという側面があったと思う。しかし、残念ながら、この嘆願書が職員会議等の公の場で議論されることはなかった。

それでも、中学校で長期欠席をした生徒たちにとって学校が「居場所」になるような学年委員会を中心とした行事づくりに取り組んだこと、またAをはじめとした問題

行動を起こした学年の生徒たちの声を丁寧に聴き取りながら学年づくりをすすめてきたことの結実として「嘆願書名運動」を位置づけることができるかと思う。

そこでは、ケアしケアされる相互依存の関係性と、問題を起こす個々の生徒のそれぞれの「文脈」が聞き取られる関係性が重要視される「ケアの倫理」に裏打ちされた自治が育っていると言えるのではないか。

2 B太から学んだこととは

B太は中学3年次に特別支援学級にいて、本校の長期欠席生徒選抜を受けて入学した。そんなB太を私は3年間担任した。(3)

1年次は筆談で訴えることがあった。聴覚過敏のB太は、調子が悪いと周囲の音が全てノイズとして入ってくるという。そんな時は授業を抜けて保健室に避難した。私は筆談で分かり合えたことに喜びを感じつつも、彼の「生きづらさ」を垣間見て、彼と関わることへの覚悟を迫られた気がした。

欠席や遅刻をすることなく、学習や陸上部での長距離走に意欲的に取り組んだB太だが、9月にHRで授業中の私語が多くなると気持ちが不安定になっていった。落ち込みが激しくなり「学校をやめたい。生きていても仕方ない。死にたい」と保健室で筆談をしたこともあっ

た。ストレスがたまり、体が思うように動かなくなるなど「揺れ幅」が大きくなっていった。しかしありがたいのはB太を支える生徒がHRにいたことだった。同じ中学出身のD平は部活や委員会で一緒に活動した。彼は苦手な数学をよくB太に教わっていた。HR委員のC子は9月から登下校も含めていつも一緒にいるようになった。ややきつい面も見られたC子だがB太という時は表情も声も優しかった。控えめなB太は普段決して目立たぬように過ごしているが、HR内の様子をよく観察し、不登校の生徒を気にして私に話をしてきたこともあった。B太の周りには女子数名が集まるようになっていた。「ケアの倫理」でいう誰もが相互に依存し合う関係性の中で生きているからこそ、周囲の生徒がB太に優しくなれたのだろう。

2年になってB太の「揺れ幅」はさらに大きくなった。6月にB太とC子がいつも一緒にいて、身体接触も見られると教員から苦情があった。B太へは私、C子へは養護教諭からと別々に話をしたが、その後二人は言い争いをし、翌日B太は朝のうちに早退した。そして次の日の文化祭準備の際に、私とB太は二度にわたって衝突をした。

HR展でアトラクションに取り組み「巨大ルーレット」を作製していた時のこと。一回目はすれ違いから言い争いをした。ルーレットづくりでB太は活躍していた

が、前日に早退すると彼の予想と違う形で完成しつつあった。朝文化委員のE美に「ルーレットを頼むね」と言われ、戸惑ったようだ。彼は言葉を文字通りに受け取るので、「頼むね」と言われ「全部自分で仕上げなければならない」と受け取ったのかもしれない。さらに「ルーレットの補強をみんなと一緒にやろうと思ったけど、動いてくれなかった」とも言っていた。

そこへ私が登場。私は私でボールを蹴って遊んでいた生徒を叱ってイライラしていた。私はルーレットの補強を自分が考えた方法でやろうとした。B太がルーレットについて話してくるとつい言い返してしまった。B太にも指摘されたが、私のハツ当たりであり、言葉では謝っているものの、「みんながやってくれないというけど、あなたはみんなを見下している」などと家父長的な私が全開していた。

困って、イライラした私が座って「あなたも座ったら」と声をかけると、B太は床を蹴って教室を飛び出した。近くにいたD平たちに頼んで追いかけてもらった。その後、B太は陸上部で準備を他の部員とやって少し落ち着いたようだった。後で教室に戻るとB太が廊下にあった。私は「先ほどはゴメンなさいね」と謝った。彼もうなずいた。まだ興奮も収まっていないから、これでいいかと思った。

2回目の衝突は、完成したルーレットを私が他の生徒と楽しんでいた時だった。後方にいたB太がキレて、大きな声を出して廊下に飛び出した。B太の目は吊り上がっていて、「まずい」と思った私は廊下に出た。彼は面と向かって「帰ります。完成してよかったですね、楽しんでください！D平から聞きましたよ、僕とC子さんのことを『引くよな』と言ったんですよね」と話した。当惑したが、これは事実だった。D平との個人面談でB太とC子がいつも二人でいることを周りの生徒がどう思っているかを聞きたくて、何気なく「引くよな」と私は話した。それを面談後B太に聞かれてD平が伝えていたのだ。

B太は「裏で言って楽しんでいればいい！僕なんかいい方がいいんです。もうこの世から消えます。ADHDで悪かったですね！発達障害で悪かったですね！」と叫んだ。教室後方を見るとC子が泣いていたので、私は「一つ言わせてもらうが、あなたがキレると周りも傷つく。C子さんは泣いているよ」と話した。

その後B太は清掃用具ロッカーに頭をぶつけて倒れた。担架に乗せようとしたが抵抗し、再度頭をぶつけようとして、泣き出した。保健室へ行く前に「謝りたい」とC子の元へ行き、話しながら泣きじゃくった。

この場面については、全国大会(4)で報告した際に議論があった。「衝突したのは対等だと思っているから

だ」との評価や「わからないものを知ろうとしているが、発達障害から遠い。ゆえに他者理解をすべきだ」との指摘を受けた。たしかに、B太から一番遠かったのは私だったのである。また「人間的素直さ、人として尊重する姿勢がみられる」「B太には安心してぶつかることのできる、頼れる存在だった」から、「フェミニズム的実践だった」とも評された。

前日迎えに来た母親には別室でいきさつを話していた。翌日の文化祭をB太は珍しく欠席した。朝、電車の中でC子と会い「二人のことをD平に話してごめん」と伝えた。C子は「なぜ言い合いが始まったのですか」と聞き、また「私が泣いたのは、急に彼がキレてびっくりしたから」と言った。

放課後にB太の両親が来校し、父親が昨日の事情を聞きたいというので面談をした。B太とC子は昨日の経緯を書面にしていた。やり取りしながらつくり、C子が打った「記録」を見せてもらった。それを読むと、双方の食い違いやB太の見方がありびっくりした。

私が「あなたも座ったら」と声をかけた場面は、『先生が被害者面のため息をつきながらその場に座る』とある。私が「先ほどはゴメンなさいね」と謝った場面は、『集合前に、先生に軽く「さっきは悪かったな」と言われる』。最後に『最終的に謝ることは無く、親にも全く

違う（先生に都合がいいように）話をした』とまで書いてあった。

父親は昨夜、B太から話を聞き「先生にも言いたいことを言って偉かったな」と伝えたそうだ。今日は怒りから欠席し、人間不信に陥っているという。「負けたくないから、来週は学校へ行く」と言うが、戻りにくいと悩んでいるのでフォローをしてほしいと言われた。

この日はどっと疲れ、彼らの記録を読んで数日は気分が悪かった。しかし後日、サークル例会（5）で報告した際、「生徒の言っていることには真実がある」と言われ、納得した。彼らの記録には、確かに「私がB太を追い詰めた」という真実があった。

また、彼らの記録には「ケアの倫理」でいう、文脈依存的な面があった。実際にB太はC子に聴き取られて語るという共同作業によって気持ちを整理し、癒されている。そして、私は彼らの記録を読むことで初めてB太の気持ちにエンパシーを抱くことができた。自分の家父長的な側面に注意するきっかけにもなった。このように変わったのは、サークル例会で仲間から指摘されて学んだからだ。

そして、週明けの朝。私は教室でHRの生徒に「B太とのトラブルは私の短気が原因。きっとこれまでも多くの人を傷つけたと思う、ごめんなさい。B太さんがHRに戻りにくいと言っているのです、よろしく頼みます」と

伝えた。その後、相談室に行ってB太に謝ると、表情は固かったが「僕の方こそごめんなさい」と話してくれた。

以後、HRの自治も磨かれていったように感じる。例えば12月の修学旅行。B太の中でHRへのマイナス感情があって、修学旅行も不安になっていた。班別研修の班決めの際、事前にB太やC子に要望を聞いた。民泊班やホテルの部屋割りは男女別になるので、男子の分け方について班長会で相談した。E美が「B太くんはD平と一緒にがいいよ」とB太のことを気にかけて発言をしてくれた。

修学旅行当日。新幹線内でHRの男子に囲まれ、カードゲームに興じたりいろいろな話題で盛り上がりたりして、B太も笑顔を見せていた。心配した民泊でも、体調不良を起こす等の問題はなかった。駅で出迎えに来た教員を目にして、私と彼は肩を組んで「ただいま！」と応えていた。

3年になったB太はHR委員に立候補し、C子と一緒にその仕事をした。毎日、B太がかん高い声で号令をかけた。受験では、志望大学の推薦入試やセンター試験に臨んだが、浪人してもう一年志望大学を目指すことになった。それでも「今は勉強するのが楽しい」と語る姿からは、高校3年間の自分の成長に手応えを感じているように見えた。C子は卒業前に書いた「自分史」の中で、

B太のことを「人よりもはるかに努力を惜しまず、自分の目標に向かって頑張ることが出来る彼」と触れていた。

B太とのかかわりの中で私はたくさんのことを学んだ。ひとつは、他者理解・他者との関係づくりのためには、いかに他者の文脈にそった理解をすすめるか、いわゆる「他者の靴を履いてみる」こと（「エンパシー」）の重要さである。さらに、その上に立って、生きづらさを抱えている生徒たちと他の生徒たちとの関係性を丁寧に紡いでいくことこそが本当に誰もが幸福になれる「ケアの倫理」に裏打ちされた「自治」づくりにつながるのだということである。

3 チケット制をやめたことの意味とは

本校は、頭髪服装指導に関して「ゼロ・トレランス」的なチケット制を取り入れていた。教員は生徒に違反の事実をつきつけるのみで、生徒の言い分を聞いたり、事の善悪を論したり、改善の口約束を取ったりする必要はない。生徒の個別事情を考慮せず機械的に処置し、累積のチケット枚数によって自動的に指導措置が決まっているので基本的に生徒ともめることはない。だから「どの先生でも同じ基準で、足並みを揃えて指導ができる」と意味づけられ実施されていた。

私は赴任した当初から、生徒が違反について理由を述べ、聞きとられる機会を奪っているチケット制に違和感をもっていたが、担任や学年主任として「最前線」に立ってこれに関わらざるを得なかった。しかし9年後に職員会議で数度にわたって議論し、廃止をした。(6)

学年主任をしていた時は、学年集団づくりがチケット制への対抗手段にならないかと模索した。チケット5枚の生徒に奉仕作業という「指導」をするが、当初は一緒に掃除を黙々とやった。建前で説教することに意味がないと考え、生徒たちが「かわいい」「オシャレをしたい」からスカートを短くはいたり髪を染めたりすることに、聞き取るべき理由があるのだろうかとの疑問に感じていた。違反をする生徒の内面まで思いが及ばず、とりあえず直せばよいとすでにチケット制に取り込まれた自分がいた。

ある男子生徒は普段無気力で、授業中の居眠りも多く、髪の毛は染めて茶色がかった。一方、行事等で体を動かす場面では生き生きとした姿を見せた。彼が頭髪検査で生徒課指導の段階で直して来なかったために、帰宅させられたことがあった。理由を聞くと「面倒くさかったから」と言うので、私は「その発言にはがっかりだ」と伝えた。彼は言い返さなかったが、家で「なぜ俺だけが。先輩で茶髪の人がいるのに」と親に愚痴をこぼしたと担任から聞いた。違反を直さない、教師の期待に応えない「がっかりな生徒」と決めつけ、彼との応答を私の方で遮断した

ということに後に気づかされた(7)。それ以降は一緒に掃除する時間を、生徒たちの言葉を聴き取るチャンスだととらえ直すようにした。すると、話をしながら一緒に掃除をしたある女子生徒が、身の回りの人間関係と生きづらさについて詳しく語ってくれたことがあった。

「チケット制を廃止したら、本校はまた乱れる」という声は教員間に根強く、なくすのは簡単ではなかった。私は全体で行う朝の立ち番や学年部で行う頭髪服装指導などには形だけでもきちんと参加することを自らに課してきた。一方で、本校職員の義務となっているチケットの持ち歩きを辞めて「良心的拒否」を貫いた。また生徒を男女問わず「さん」付けするようにした。呼び捨てをやめると生徒に対して「上から目線」という感覚が無くなった分が楽になり、生徒からも好評だった。

本校が県の指定を受け「人権教育推進校」となった時、私は保健相談課長という立場にいた。養護教諭と人権教育を牽引しようと、全校一斉に「人権を学ぶLHR」を行った。相談室に課員が交代で入り、生徒の相談に耳を傾けることにやりがいを感じた。不登校や教室に入れない生徒、生徒指導中に教員との関係がこじれてしまった生徒などに対して「サポート委員会」を数度開いて、情報の共有や問題点の整理を試みた。

そして、保健相談課長と兼任で再び担任をした際には、B太のような生きづらさを抱える生徒に関わりながら、

同僚に情報共有をしたり、時には自分自身の悩みを訴えたりした。今思うと、こうした様々なポジションから教員集団に向けて「ケアの視点」を発信できていたのではないだろうか。そして少しずつ時間をかけて教師集団の関係性が変わっていったように思う。

そしてついに、職員会議でチケット制存続の是非について議論する機会が訪れる。管理職による「業務スリム化」のためのアンケートがきっかけになり、その結果に基づく検討が各分掌や管理職でなされ、「朝の登校指導とチケット制の廃止」が他の事項と一緒に職員会議の議題に挙げられた。生徒課の検討結果は「登校指導は継続するが、チケット制は廃止する」というもので、「頭髪服装指導は各クラスや学年でも継続的に行われていて、生徒が自己管理できるようになってきた。チケットを切られて学年指導や謹慎指導になった生徒は近年いない」という理由だった。12月の職員会議では、時間がなくて検討結果の報告のみとなり議論になるような気配はなかった。私は当時「こんなにあっさりと、チケット制がなくなってしまうのか！」とうれしい半面拍子抜けしたことを覚えている。

ところが、1月の職員会議では紛糾した。再度チケット制廃止について提案された際に、A先生が「これまであまり議論されませんでした。私は生徒課原案に反対です。生徒はチケットを切られたくなくて服装に気をつけているので抑止力になっています。チケットがなくなったら

心配です」と反対意見を述べた。A先生とは時々、私の教科準備室で昼食を取りながら本音を交わす仲で、彼の意見は既知のものだった。すると、本校での勤務年数が一番長いB先生が、チケット制導入の経緯を話し出した。長々と話して「だからチケット制は維持すべきです」と言うので、私は「(廃止の)原案に賛成です。そもそも頭髪服装指導は生徒の人権を侵害する恐れがあり、チケット制は生徒から異議申し立ての権利を奪うものです。私は以前から問題を感じ、近年は良心的拒否もしていました」と反論した。

司会の副校長が生徒課長に振ると「アンケートに先生方から辞めるべきだとの意見が寄せられたので、生徒課としてはその方向で議論しました」と何ともやる気のない返答だった。それを聞いた副校長は「今日の議論を聞くと、チケット制は継続した方がよいでしょうね」とまとめようとした。私が「ちょっと待ってください。そういう結論は性急じゃないですか？これだけで原案が覆るのですか？」とキレ気味に反論すれば、副校長は「だって仕方ないでしょう、時間もないのですよ」と逆ギレした。確かに勤務時間は過ぎていた。A先生が助け舟を出してくれた。「もっと議論しましょう。今日は3人しか発言していません。本校にとって大事な問題ですよ」と言うと副校長もしぶしぶ納得し、議論は継続となった。

2月の職員会議では、まずこの年赴任したC先生が「実

際チケットがどれくらい切られているのでしょうか？私はチケットの意義をあまり感じていません」と口を開いた。生徒課長が不在で代わりにD先生が「私自身はチケット制をやめていいと考えます。生徒も先生も変わるチャンスだと思います」と言った。数年前、彼は学年集会で生徒たちに「俺はもうチケットを持たない。お前たちも切られるようではだめだ」と話していた。D先生の意見は、教師はチケットに頼らず指導すべきで、生徒は自分たちで服装に気を付けるべきだという意味であろうが、彼の「変わるチャンス」という言葉は、私には前向きな表現だと感じられた。私は「D先生に同感です。もうチケットはその役割を果たしたと言えるのではないのでしょうか。今は各先生がチケットに頼らずとも、生徒と話をしながら指導をしています。それぞれの持ち味を発揮しながら指導していけばいいし、頭髪服装指導それ自体をやめようと言っているのでもありません」とやや政治的にふるまう発言をした。すると進路課長のE先生が「本校は中学時に長期欠席した生徒を受け入れているのに、チケット制をやっている当初から戸惑いました。私たち教員にとって恥だと思います」と続いた。

ここでしばらく沈黙となった。副校長が「廃止の意見が続きましたが、別の意見はありませんか」と促すと、反応があった。まずは、若手のF先生が「チケットがなくなると、自分はどう指導するか迷いますが…。そうか、D先生

のいうように変わるチャンスなんですね」と応えた。次に教務課長のG先生が「教員がチケットを持ちながらも切らないという指導が一番良いのではないかと思います」と言う。チケットという「鎧」に縛られているのではないか、その「鎧」を捨て去ればいっそのこと楽になれるのにと考えさせられた。

そして最古参のB先生がまたしても発言した。つぶやくように「みなさんは、生徒に凄まれたことがありますか？私は以前、服装指導をした生徒に凄まれました。私は弱い教員ですから、その時はとても困りました。やはりチケットは必要だと思います」と話した。再び沈黙となったが、E先生が「B先生の気持ちはわかるつもりです。私も以前『困難校』に勤めていました。その時心掛けたのは一人で対応しないということで、複数の教員で対処をしました」とB先生を見ながら話した。

実はB先生は当時、メンタル面の不安や不調を抱え、養護教諭やスクールカウンセラーに定期的に面談を受けていた。強面をつくることができない生真面目なやさしいB先生だから、チケットという「鎧」を身にまとうことでようやく服装指導を遂行できてきたのであろう。

私はB先生が「自分の弱さ」という「本音」をここで出してくれて良かったと思った。誰も好き好んで生徒との関係性を壊したいとは思わない。そういう意味では本当は誰もが「弱い教員」で、私は「なめられる教師」だ。も

しも生徒に凄まれたら逃げたいし、助けを呼びに行くことだろう。

最後に校長が「この議論では業務スリム化の点だけでなく、チケット制が教育的に是非かを論じてもらったように思います。また、生徒会から『チケット制をやめて』という声が挙がったらなお良かったのですが」と話し、決着がついた。こうして職員の総意でチケット制を廃止した。ここまで多くの教員が意見を述べた職員会議はそうそうなかったし、経験年数や立場に関わらず対等になって議論ができたと感じた。

赴任当初、生徒課からチケットを切る際は「明るく笑顔で、生徒と会話をしながら切ってくれ」と言われたのを思い出す。始めは憤慨して聞いたものだが、改めて考えると当時から「ゼロ・トレランス」に「笑顔で会話」という人間味のある指導を入れて「変形」させることで、生徒の話を聴き取ることを感じていたのではなかったか。

しかし実際にはチケット制を機械的に運用して（自ら考えることを放棄して）、生徒から聴き取るチャンスを失っていた。そんな私たちが2度の職員会議を経て、生徒との関係性を対等に築くことの重要性によりやく気づき始めた。「弱さ」と本音を出し合った職員会議という「討議空間」をつくったことでチケット廃止を自分たちで決めた。それは、教師集団としての「自治」を取り戻

した瞬間でもあったように思う。チケット制廃止というダイナミズムに見られる自治、すなわち（教師）集団づくりに、「相互依存の関係性」と「文脈依存」を重視する「ケアの倫理」がここでも関わっていたのだと私は思いたい。

〈注〉

(1) キャロル・ギリガン『もうひとつの声で』風行社、2022年（1982年発刊の増補版）

(2) 坂杉隆通「学年づくりと『嘆願署名運動』」（『高校生活指導』2015年・199号）

(3) 坂杉隆通「B太と歩んだ3年間」（『高校生活指導』2019年・208号）

(4) 2019年名古屋大会に一般分科会で報告した。

(5) 静岡高生研では、以前よりサークル例会を中心とした活動を続けている。2017年当時は県内4地域で、毎月サークル例会を開いていた。現在もオンラインによる全県例会でお互いに学び合っている。

(6) 坂杉隆通「チケット制がなくなった日」（『高校生活指導』2018年・206号）

(7) 井沼純一郎「実践！ゼロ・トレランスとの闘いかた」（『高校生活指導』2012年・192号）